

コンクリート側溝に落ちたニホンイシガメ

小賀野大一

290-0151 千葉県市原市瀬又962-40 千葉県野生生物研究会

Record of the Japanese pond turtle, *Mauremys japonica*, in street gutter.

By Daiichi Ogano

Chiba Prefectural Wildlife Research Society, 962-40, Semata, Ichihara, Chiba 290-0151, Japan.

陸域と水域を頻繁に移動するニホンイシガメにとって生息地の分断は減少要因の1つとなりうる(小賀野他, 2015). 分断をおこすものとして道路の敷設や河川改修による護岸のコンクリート化などが挙げられる. 今回は規模は小さいものの, 生息地となる水田周辺ではよく見られる3面張りのコンクリート水路を取り上げ, 小さなコンクリート側溝に落ちたニホンイシガメを2例紹介する.

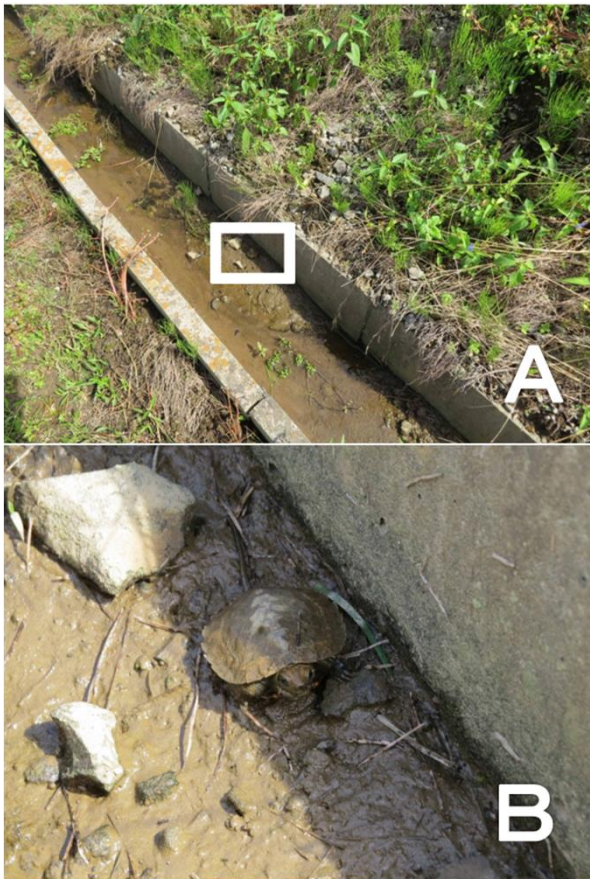


図1. 側溝に落ちたニホンイシガメの幼体

A: 側溝のタイプを遠方より示した. 図の左側に水田があり, 右手農道の先に畑と斜面林がある. 畑の持ち主から, 畑でイシガメの産卵が行われているという情報を得ている. B: 図Aの白枠の部分拡大した図である. コンクリート側溝に4cmほど土砂が堆積しており, この日は水がほとんど溜っていないかった. まとまった雨が降ると増水し排水路としての機能を果たすようになる.



図2. 側溝に落ちたニホンイシガメの雄

A: 側溝のタイプを遠方より示した. 図の左側に水田があり, 右側には斜面林がある. 斜面林を越えて下った先に越冬場所である池があり, そこから移動してきた個体であると思われる. B: 図Aの個体を上部から撮影した. 体力のある個体であれば, 側溝の隙間や垂れ下がった草を利用して脱出が可能かもしれない.

水田に接した山側の畑付近に産卵され、そこで孵化した幼体は生息地となる水田に向かう際にコンクリート水路にその行く手を阻まれ、落下してしまう。図1は、2015年9月27日に確認された背甲長37.02mm、体重9.4gの生まれて間もない幼体(0歳)である。高さ26cm程の垂直の壁(側溝のサイズは幅30cm×高さ30cmで泥が堆積していた)は到底登ることはできないだろう。一方、寒い冬を河川や池で過ごしたニホンイシガメも4月頃になると活動を開始し、越冬場所から離れて水田へと移動を始める。あと一歩で水田に到達できる地点にコンクリート側溝があると水田には行き着くことができない。2016年4月23日に確認された背甲長137.92mm、体重317gの老齢な雄はそのような状況の個体と思われる(図2)。幼体と比較すると体力があるため、落下したことが即座に死に直結するとは考えにくい。が、目的の水田に行くには遠回りをしなくてはならず体力の消耗は避けられないだろう。なお、側溝のサイズは前者に類似した小型の側溝で幅24cm×高さ24cmであった。

これまで水田の圃場整備による生物への影響はカエル類などで知られている(例えば長谷川, 1995)。カメ類は重い甲羅を背負っているため跳んだり跳ねたりすることができない生物であるため、垂直の壁は移動の大きな障害になるだろう。水田周辺では今回紹介した小型のタイプ以外に、より大きなサイズの側溝が見られる。大型タイプの側溝に落ちれば成体であっても這い上がることができず、増水時には生息地から離れた遠方へと流されてしまうことが容易に予想される。圃場整備の一環として実施されてきた水路のコンクリート化による影響を如何に効率よく回避するかは、貴重種のニホンイシガメの保全を考える上で重要な課題の1つと考えられる。

引用文献

- 小賀野大一・尾崎真澄・小菅康弘・近藤めぐみ・西堀智子・松本健二・長谷川雅美. 2015. 千葉県ニホンイシガメ保護対策協議会の設立とその活動. 爬虫両棲類学会報 2015(2):174-183.
- 長谷川雅美. 1995. 谷津田の自然とアカガエル. p105-112. 大原隆・大沢雅彦(編). 生物-地球環境の科学-南関東の自然史. 朝倉書店, 東京.